

子ども理解を深めるための視点についての一考察 作業療法士とのコンサルテーションによる保育者 の子ども理解の事例研究

著者	大久保 めぐみ
雑誌名	大阪総合保育大学紀要
号	14
ページ	143-152
発行年	2020-03-20
URL	http://doi.org/10.15043/00000977



〔研究ノート〕

子ども理解を深めるための視点についての一考察

—作業療法士とのコンサルテーションによる保育者の子ども理解の事例研究—

大久保 めぐみ
Megumi Okubo

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

幼児教育・保育の現場では、子ども理解が保育の出発点と位置づけられ、現場の保育者たちも懸命に子どもを理解しようと努めている。しかし、実際には子どもを理解することは難しく、多くの保育者の悩みや困難は尽きないのが現状である。その原因の一つとして、「子ども理解」は「子どもの内面に寄り添うこと」に重きが置かれていることにあるのではないだろうか。「子どもの内面に寄り添うこと」は、非常に重要なことであるが、同時に非常に難しいことである。なぜなら、子どもの行動が理解できないことによって、内面に寄り添うことを難しくさせることがあるからである。これまでも子ども理解についての研究は数多くなされ、子ども理解の視点についての研究も行われている。子ども理解を深めるためには、多角的な視点の必要性も言われている。

本研究では、①「幼児教育・保育において求められている子ども理解とはどのようなものであるか」を今一度確認し、②「保育者が子どもを理解しようと努めながらも、保育において葛藤し、悩み、困難を抱えているのはなぜなのか」を一考する。そして「保育者が子どもを理解する時に必要とする視点」について、作業療法士とのコンサルテーション事例から検討し、③「作業療法士の視点は、保育者が子ども理解をする過程でどのように働き、作業療法士の視点が子ども理解にどのように有用であるのか」について検証したい。

キーワード：子ども理解、視点、作業療法士、コンサルテーション、行動の分析

I. 本研究の背景と目的

幼児教育・保育の現場において保育者は、よりよく、深く子どもたちを理解するように努めている。集団で過ごす子どもたちを「一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」と『幼稚園教育要領』で定められているように、一人一人の特性に応じること、また発達の課題に即した指導をすることが保育者に求められているのである。『保育所保育指針』でも第1章1（3）ウ「子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること、その際、子どもの個人差に十分配慮すること」とある。また『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では第1章、第1「（4）乳幼児期における発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、園児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、園児一人一人の特性や発達の過程に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。その際、保育教諭等は、園児の主体的な活動が確保されるよう園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」とある。

このことは保育者には難しい課題である。「一人ひとりの子どもを理解すること」「発達過程に応じて保育すること」さらに「一人ひとりに応じてクラスとして集団での保育実践をすること」が求められているのである。そのため保育者は、一生懸命子どもを理解しようと努めている。しかし、努力しても理解し得ないことが多く、日々悩み、葛藤しているのが現状である。

加藤は、保育者が気になる行動をどのように理解したらよいのか、頭を悩ませており、ほとんどの場合、その原因がわからないため、問題に対してどのように対応したらよいのか、その方法もみつけにくいのだろうと指摘している。そして保育者は気になる行動があるとすぐに原因を特定しようとし、自分なりに考えた原因への対応法を実践する。子どもが起こす行動にはいろいろな理由や原因が考えられるが、表面に現れる行動を見て「多動」「発達障害」などのように思い込んでしまうと、対応方法も思い込みとなり、根本の問題解決には至らない可能性があるとして述べている。ここでの保育者の悩みは、子どもの気になる行動への理解と対応についてである。加藤も述べているように、子どもの行動にはいろいろな理由や原因が考えられるが、その理由や原因が解らない

から、子どもをどのように受け止め、どのように対応すればいいのか悩むのであろう。

岩崎・藤樫・関口らの調査によると「保育の中での悩みや問題」で多いのは「個々の子どものことについて」「子どもの自発的な遊びの指導・援助について」「活動の設定内容や教材研究について」「家庭との連携について」などが上位に挙げられた。岩崎らのその後の調査では、保育者が「幼児の行動の要因を探ること」、「個々の幼児を把握すること」、「気になる子どもの行動に振り回されること」等の悩みを多く抱えていることが分かった。このように、保育者は子どもの行動の要因を探ったり、個々の幼児を把握したりすることが難しいと感じている。子ども理解というのが保育者にとってとても高い専門性を要することと考えられる。

上山・杉村も保育者には多様な保育ニーズに応える高い専門性と問題解決力が必要とされとし、子ども理解が保育に必要なスキルとして、日々の実践や研修を通してどのように深めていくかが課題となっていると述べ、保育者が子ども理解を深め、多様な保育ニーズに応えようと努めていることが分かる。

このように、保育者として必須とされる子ども理解は、基本でありながらもとても難しい。そこで本研究では「子ども理解」について①「幼児教育・保育において求められている子ども理解とはどのようなものであるのか」②「保育者が子ども理解に努めながらも、保育において葛藤し、悩み、困難さを抱えているのはなぜなのか」について吟味し、「保育者が子ども理解をする時に必要としている視点」について、作業療法士とのコンサルテーション事例から検討し、③「作業療法士の視点は保育者が子ども理解をする過程でどのように働いているのか」「作業療法士の視点が子ども理解においてどのように有用性があるのか」ということについて検証する。

尚、幼稚園教育要領では「幼児」、保育所保育指針では「子ども」、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では「園児」と表記されているが、筆者は「子ども」と表記する。また、幼稚園教育要領では「教師」、保育所保育指針では「保育士」、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では「保育教諭」と表記されているが、筆者は「保育者」と表記する。ただし、引用文はそれぞれの言葉で表記することとする。

また本論文での「作業療法士の視点」は、外的活動や行為から子どもの行動観察をし、観察で見た子どもの行動特徴からその子の心身機能と発達の特徴、さらには感覚機能の特性といった内面を分析した上で実態把握をする視点を指す。

Ⅱ. 子ども理解について

先に述べたように、保育者は子ども理解を重要とし、研修を重ね、実践に活かせるよう努めている。では、保育・教育において、子ども理解をどのように捉えられているのだろうか。

2019年3月に文部科学省より『幼児理解に基づいた評価』が出された。これは「幼稚園の教師が一人一人の幼児を理解し、適切な評価に基づいて保育を改善していくための基本的な考え方や方法などについて解説したもの」である。この中で大切にされていることは「幼児理解」である。「幼児期にふさわしい教育を行う際にまず必要なことは、一人一人の幼児に対する理解を深めること」「幼児を理解することが保育の出発点」と言われている。そして、一人一人の幼児のよさを発揮して育つために、幼児を理解することは何よりも大切であること、またそのためには周囲の大人との信頼関係、温かい関係が基盤となることが記されている。

相浦も乳幼児期にかかわる保育者の専門性として、子ども理解は欠かせないとし、集団保育において望ましい子どもの育ちを保障するためには、保育者による子ども理解の在り様が重要で、子ども理解は保育者の力量が問われると述べている。

中坪ら（2011）は、保育の営みについて次のように述べている。「保育の営みは、幼児一人ひとりの育ちを援助するものであることから、出発点に保育の計画を位置付けて、計画に沿って保育を実践し、確認・改善するよりも、まずは保育者が眼前の幼児を理解すること、そこから保育を計画（デザイン）し、実践・省察を通して、新たな幼児理解を構成することの方が保育現場に即しているように思われる。（中略）幼児理解は重要な基盤であり、従って保育者は、日々の保育の中で〈その子〉とのかかわりを通して、自分の中の〈その子〉理解を常に更新（update）し続けているのである。」そして「保育の計画よりも、保育者の幼児理解が重要な出発点であること」「保育者の幼児理解は常に暫定的であり、更新し続けるものであることを重視する。」とある。

子ども理解がいかに大切であり、保育計画を立てる（保育をデザインする）際にも子ども理解がなくてはできないと、子ども理解の意義を述べられており、子ども理解がなくては保育が成り立たないことがわかる。

では、実際に子ども理解とはどういうことなのか。保育者はどのようにして子どもを理解しようとしているのか。『幼児理解に基づいた評価』（文部科学省）には以下のように記されている。「幼児を理解するといっても、幼児の行動を分析して、この行動にはこういう意味があ

ると決め付けて解釈をすることではありません。まして何歳にはこのような姿であるという一般的な一般化された幼児の姿を基準として、一人一人の幼児をその基準に照らして、優れているか劣っているかを評定することではないのです。(中略) 幼児を理解するとは一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の行動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとすることを指している」とある。さらに「幼児の生活する姿から、その幼児の心の世界を推測してみる」「推測したことを基に関わってみる」「関わりを通して幼児の反応から新しいことが推測される」と続いている。ここでは、子ども理解は「子どもの行動の分析や行動の意味を考えること、また一般的な幼児の姿と照合することではない」とされている。そして子ども理解で大切なことは「保育者が幼児の心の世界を推測すること」と言われている。子どもの心の世界に寄り添い、思いを推測しながら接して「つながった!」と思える瞬間があり、子どもの心とつながり合い、心通わせながら生活や遊びを進めていくことは大切であり、それは保育者の喜びでもある。しかし、見えない心の世界を推測するだけでは、理解し難い子どもの行動が多くあり、そのことに悩んでいるのも事実である。(岩崎ら)

幼児教育・保育においては、子どもの行動や表情から、思いや考えなどを推測して理解し、受け止めることに重きを置くことが多いようである。(平松)(権藤・柴・戸江) 子どもに寄り添い、内面を理解することは、子ども理解において大前提のことで大変重要であるが、それは保育者の感受性や勘に依るところもあり、曖昧なところも多いため、努力だけでは理解しえないことにもぶつかり、子どもに適切な対応ができないことも多いのではないだろうか。

子ども理解の重要性を述べている相浦は、子ども理解を「一般的な段階と照合させて捉える一般的理解・知的理解」と「思いや考えに寄り添う個別的理解・感覚的理解」をあわせもち、一般的理解に基づく視点を有し、子どもと共に生活する中で個別的理解を深め、さらに子どもの行動の意味を考え、次の育ちの見通しを持ったかわりをする中で、子ども理解に基づいた計画と実践が確立するとしている。つまり、思いや考えに寄り添うことにプラスして一般的理解・知的理解も必要であるということである。

しかし、『幼児理解に基づいた評価』にもあるように、これまで一般的理解、つまり行動を分析する視点は、否定的なところがあった。確かに一般化された基準と照らし合わせて、「できる・できない」「優れている・劣っている」という評価をするだけの見方は、子ども理解とは

言えない。しかし、発達の手順を知り、目の前の子どもがどのような発達段階にあるかを見極め、「身体の手発達手どうか」「認知の手発達手どうか」「心の発達手どうか」「生活面での発達手どうか」ということを子どもの行動から分析することのできる視点は重要であるとする。その分析によって「できる・できない」「優れている・劣っている」ではなく、その子どもの身体的特徴、発達の特徴を知り、その子どもの行動の原因となる身体の手組みや感覚特性を知ること、その子どもの得意とすることや苦手なことが分かり、さらにその子どもに必要な支援、ふさわしい環境が解ってくる。その結果、子どもたちは自分らしく、生き生きと過ごすことができるのである。

また、佐藤・相良は、幼児の内面を読み取る際には、目の前の子どもの姿だけでなく、背後にある様々な要因にも注目し、多角的に理解を進める必要があるとし、幼児理解の視点を「外面的理解」「内面的理解」「背景」「他者の内面理解」の4つの大カテゴリーに分類し、16の下位カテゴリーを作成することにより、子ども理解の一助を試みている。

以上のように、幼児教育・保育の世界において「子ども理解」は最重要事項として据えられ、多くの研究がなされている。理解の視点としては、心や思いに寄り添う内面的理解に重きが置かれて、言動に現れる外面的理解に関しては、評価的になりやすいため、好ましくないとと言われることが多かった。しかし、外面に現れる行動の理解が難しいために教育・保育における困難さを感じているという報告も見られる。それでは保育者が子どもを理解するためにどのような視点が有用であるのかということについて、次章で考える。

Ⅲ. 保育者が子ども理解において必要とする視点

それでは、保育者が子どもを理解するときにはどのような視点をを用いているのだろうか。渡辺(2000)は、保育者の子ども理解の視点の出発点は保育者との信頼関係とし、その上で「子ども個人の発達段階や発達のベースの把握」「子どもの遊び課題の読み取り」「仲間関係の把握」「クラスの手育ちの把握」「家庭環境の把握」「行為面での理解」を上げている。そしてそれぞれの視点が子ども理解における2つの基本特性、「内面的理解」と「表面的理解」を備えているとしている。渡辺は、子どもの気持ちを受け止めるだけでは保育者の専門性は見いだせないとし、その子個人の心身の手発達段階やその子なりの発達のベースを把握する必要がある、と述べている。しかし、そのために具体的にどうすれば子どもの心身の手

達段階やその子なりの発達のパースを把握することができののかについては記されていない。

よりよい保育をつくり出すために、『幼児理解に基づいた評価』（文部科学省）では「幼児を肯定的に見る」「活動の意味を理解する」「発達する姿を捉える」「集団と個の関係を捉える」「保育を振り返り見直す」とある。「発達する姿を捉える」では「幼児の生活する姿から発達を読み取ることが大切な意味をもつ」とある。しかし、そこで言われていることは、何かができるようになった、というような表面に現れた事象だけに目を奪われず、「人格の全体に関わる深い意味をもつこととして捉えるべきだ」とされている。そして「幼児自身が自分の発達を体験する姿を見守ることが、教師の大切な役割」と述べてられているが、この記述からは、具体的にどのようにして発達する姿を捉えるのか、幼児を肯定的に見るためにどうすればいいのかが分からない。

先にも述べたように、佐藤・相良は幼児理解の視点を4つの大カテゴリと16の下位カテゴリに分類することにより、子どもを多角的に捉え理解することを提案している。しかし、これらの視点は、子どもの行動の理由や原因を捉えることにはつながっていない。

保育者は目に見える子どもの行動に悩み、その対応に困難さを覚えている。そのことを解決するために、行動の背後にあって目に見えない要因を捉える必要があると考える。なぜなら、行動の背後にある要因を捉えることができると、子どもの行動の意味が解るようになり、その子どもにどのように関わるといいのか、どのような遊びが楽しめるのか、どうすれば安心してその子らしく過ごせるのか、などを理解することができるようになるからである。どれだけ目に見える子どもの行動を見つめても、推測によって内面に寄り添っても、子どもの行動の要因がなぜなのか、どうしてそのような行動をするのかがわからなければ、誤った子ども理解、誤った対応をしてしまいかねない。

筆者の先の研究において、保育者が作業療法士と連携することによって保育者の子ども理解が変化することが明らかになった。連携する中で保育者が作業療法士に求めていることは、作業療法士の子どもを見る（理解す

る）視点であった。その視点によって、保育者は子どもの行動の背後にある子どもの特性や行動要因が解るようになり、子どもにどのように対応すればいいのかが解るようになるなど、子ども理解が深まることが明確に示された。さらに、子ども理解が深まることによって保育者が今までとは異なる視点で子どもに対応するようになり、子どもの行動面、情緒面など様々な面での改善が見られたという変化も起こり、作業療法士との連携の意義と重要性が示唆された。（2017. 大久保）このことから、作業療法士の視点は、教育・保育において子ども理解を深めるために必要な視点の一つと考える。

Ⅳ. 作業療法士の視点を通して子ども理解を深める ー作業療法士とのコンサルテーションの事例からー

A園において定期的に作業療法士とのコンサルテーションを行っている事例を通して、保育者が作業療法士の視点から何を得ているのか。そのことによって子どもとの関係や保育がどのように変化するのかについて検証し、作業療法士を通して子ども理解を深めることの有用性について一考する。

1. A園におけるコンサルテーションについて

- ①コンサルテーションの開始時期 2013年より
- ②コンサルテーションの頻度 年4回
- ③方法

作業療法士がA園に来園し、午前中は子どもの様子を観察する。観察しながら保育者と言葉を交わし、子どもについての情報交換をする。時には、子どもと直接話したり、子どもの身体の様子を確認したりすることもある。

午後（子どもの午睡中）に、担任以外の者も含めてできるだけ大勢で作業療法士と振り返りの時間を持ち、職員全体の子ども理解を深める。

2. 作業療法士とのコンサルテーションを通して保育者が子どもを理解する過程の一事例

（作業療法士＝OT 保育者＝㊦ と記す）

〈㊦が気になること〉

- ・手をパタパタに舐めたり、服の袖や裾を口に入れたりする。
- ・タオルやタオルケットをグューグューに口の中に押し込む。



OT：午前の遊びや活動を観察し子どもの強みと弱みを捉える
強み＝一緒に活動に参加し、一生懸命取り組んでいる。

友だちに優しく関わっている。

保育者に話しかけることができる。

弱み＝困った表情をすることが多い。

笑顔が少ない

時々、友だちから遅れることがある。



OTの疑問

①いつから？

②どんなときに？

③手を舐めないのはどんな時？

④困った表情と手を舐める時は関係している？

⑤一生懸命取り組んでいるが、分かっているか？



㊦から情報収集

OT「手を舐めるのはどんな時？」

㊦「何をしたいのか分からない時」

OT「先生にベタベタすることやギュッと物を持つことはある？」

㊦「そういう姿はあまりない」



㊦から情報収集

OT「他に気になることは？」

㊦「会話が気になる。色々なお話をしてくれるが、いつも同じ話。一方的に話してくるのでこちらからも投げかけるがうまく答えられず、内容が分からない。」



OT「他の場面でうまく伝えられないことはある？」

㊦「給食でおかわりがしたい時に『もっと食べたい』とか『おかわり欲しい』ではなく『もうちょっと食べれるなあ』という表現になる。あと、友だちに何か言われると（友だちが怒っていないのに）ビクッとして『ごめんごめん』と必死で謝る。」



OT「お家でのお母さんの関わりはどうか？」

㊦「何か悪いことをした時にはかなりきつい口調で怒るようです。小さい時から第一子として自分のことは自分でするように育てられ、またそれに本児は応えてきたと思います。母は何かを伝える時の伝え方も上手ではなく、話を切っていく様子が見られます。」



OT の視点による子ども理解のための解釈

お母さんとの関わりで十分に安心を持つことができず、甘えたいけど甘えられず、我慢（抑制）していることが多いことが考えられる。この年齢であれば、お母さんや周囲の大人に褒められ、うれしい気持ちを表現する。興奮がもっと高まっていいが、本児は自分の気持ちや行動に抑制をかけている。園でも常に周りの目を気にしたり、不安が高かったりするため、自分自身の中で安心を作るために手や服やタオルを口に入れていた。指吸いや爪噛みも同様、口に物を入れることで安心する作用が働く。（触覚の働き）同じ内容の話を繰り返すのも、自分自身で安心を保つためかもしれない。保育の中で本当は困っているけど、一人で耐えている。積極的、直接的に「分からない」と言ったり「助けて」と頼んだりすることはしないで、困っている素振り（表情や言動）は出しているの、保育者が気づいて代弁してあげないといけない。

本当はお母さんとの安心を作ることがベストだが、お母さんにこのことを伝えたり、対応を変えてもらったりすることを求めるのは難しいので、保育の中で本児が安心できる環境を作る必要がある。



㊦の気づき

これまで、気になりながら的を得た対応ができなかった。「本児の姿を受け止めなければ！」と思いながらも、ベタベタの手や服、口いっぱいのタオルが気になり、受け入れがたいところもあった。

本児との関わりや信頼関係の形成が大事だとは分かっていたが、手先の使い方も気になるし、会話も気になるし、いろいろ気になる中で実際何をどのようにしたらいいか方向性が定まらなかったが、まずは〈関わりから〉ということが明確になって、そこから始めようと思った。



コンサルテーション後の保育者（担任）との振り返り（保育者への聞き取りを通して）

* 本児が朝、お母さんとの別れ際に泣いたとき、「泣けた！（泣くことができた！！）」と喜んで受け止められた。

* 友だちと玩具を取り合いして喧嘩し、半泣きになった時も、「喧嘩ができた！！」「もっともっと感情出していいよ！！」という思いで見守り受け止めることができた。

* 遊ぼうって誘ってくれたり、話しかけてくれることが「よっしゃ！！」と嬉しくなった。

⇒ OT と話し、方向性が明確になったおかげ。本児のことが解り、何に困っているのか、どのように対応するのがいいのかが解るようになった。

これまで、関わり方かなあと思いながらも向き合い切れていない自分がいた。本児の話の勢いやまとまらない内容や質問に対する答えの噛み合わなさなど、現象面が気になって「なんか違う…」と受け止め切れていなかった。

でも話の内容ではなく、本児にとって話していること自体、私とつながろうとしていることが OK なのだと思うと、話が噛み合わないことも内容も気にならず、話してくれることが嬉しくなった。

今は、本児が私に喋りたいんだという思いが伝わるようになって、思いも解るようになった気がする。今までは、

訳が解らず〈不思議な子〉と思っていたが、本児に「近づけた!」という実感があり、かわいいと思うようになった。私自身が変われた。OTに聞いてもらって、本児の姿を謎解いていくことで、私が動いた。すべきことが明確になったことが大きい。

*さらにその後、本児の謎だった人の絵（絵として表現することが難しかった）が完全に「人」であることが分かるような絵が描けるようになった。
⇒本児の伸びもあるが、人とのつながり、「先生とつながった!」という実感は大きいと感じる。挙動不審な行動もかなりましになっているのは、少しずつ安心して過ごせるようになったからではないかと思う。

3. 考察

事例を通して保育者の子ども理解の過程を辿ってみると、子どもの行為の意味が分からず、子どもを受け入れられなかった保育者が、作業療法士とのコンサルテーションの後、子どもの行為の意味が分かるようになり、子どものことを受け入れることができるようになっていく。

保育者は子どもの行為現象に目がいき、気になりながらも受け止め切れずにいた。「手をベタベタに舐めたり、服の袖や裾を口に入れる」「タオルやタオルケットを口の中に押し込む」「いろいろ話しかけてくるが常に一方通行で内容がよく分からない」「『おかわり欲しい』と素直に言えない」などの姿を「受け止めなければいけない」と思いながらも、〈不思議な子〉と感じ、具体的に何からどうすればいいか分からずにいた。ここに「寄り添う」難しさがある。目の前の子どもに「寄り添いたい」「思いを受け止めたい」と思いながらも、子どもが現す様々な行動が気になり、嫌な行為として映り、時に受け止められず、葛藤を覚えることになる。

コンサルテーションにおいて作業療法士は子どもの姿を観察し、「子どもの強みと弱み」を見つける。強みの中にも弱みの中にも、子どもの状態を表す要素が含まれていることをキャッチする。その姿を通して外面的に現れている子ども像を捉え、そこから保育者の気になる行動要因の分析をしている。行動要因の分析は子どもの姿と保育者からの情報を掛け合わせて行っている。今回の分析の要素として「感覚特性の面」「発達面」「情緒面」「認知面」から、保育者に質問しながら子どもの行動の要因を絞っている。その日だけでなく、日常の様子や親子関係に至るまで細かく見つめ、確認しながら、本児がどのような子どもで、何に困っていて、何を欲しているのかを探りながら本児についての理解を深めている。

まず、「手を舐めるのがどんな時か」という問いから「何をしたいのか分からない時」であるという原因の一つをつかむ。次に、感覚特性面からの要求があるのかどうかの確認のために「先生にベタベタすることやギョッと物を持つことはあるか」と問い「そういう姿は

あまりない」ということから、感覚遊びの発達段階でもなく、感覚の鈍さがあるとも言えないと考え、この事例の場合、本児の感覚特性や発達面などの凸凹さよりも、情緒面での不安定さが大きいのではないかと推測された。さらに、「自分の思いはあるのにうまく伝えられていないのは、先生や友だちに対して安心が持てていないためだろうか？自分を抑えているようでもあるが、お母さんには安心を持てているだろうか？」と推測し、母子関係の確認をしている。その結果、母子関係においても安心を作ることができていない様子が伺われ、本児なりに一生懸命保育者とつながろうとしていることが推測された。一方的に話してきたり、同じ話を何度も繰り返したりすることは、本児なりの保育者とのつながりであり、「話す内容ではなく、その行為（つながろうとすること）を受け止めること」、「積極的に素直に言葉で言い表せないという本児の出しにくさを汲み取って『おかわり欲しいの?』『一緒にしよう』『貸して欲しい?』などと本児の気持ちを言い表してあげること」、「喜怒哀楽が十分に出せるようにすること」、「怒ったり泣いたりすることを喜んで受け入れること」、など関わり方の具体的な方向性が明確になった。

作業療法士とのコンサルテーションを通して保育者が気づいたこと、変わったことについては「コンサルテーション後の保育者との振り返り」に挙げられていることをまとめると以下の2点となる。

①作業療法士とのコンサルテーションを通して、子どもの状態が解り、子どもが何に困っているのか、それに対してどのように対応すれば良いのかが解るようになった。

子どもの行動は変わらないのに、〈不思議〉と思って心情的に受け入れることができなかった行動だが、どうしてその子どもがそのような行動をしているのかが解ることによって、目に見える行為は気にならなくなり、子どもをどのように理解し、受け止めればいいのか解るようになり、〈不思議〉な行動をOKとして積極的に受け入れることができるようになった。

②保育者自身が「自分の心が動いた」ことを実感してい

る。「子どもと向き合う」ためには、心と心のつながりが必要であるが、その心と心をつなぐためにも子どもの行動の原因についての理解が必要であることが示唆されている。子どもと向き合おう、受け止めようと思っても行動面の意味が理解できなければ、どこか受け止め切れない感情がわいていたが、行動の原因が解ると「だから同じことを繰り返して話すのか」「だからベタベタになるまで手を舐めたり、口に物を突っ込むのか」が解り、そこをしっかりと受け止めるこ

とができるようになり、その結果保育者自身に子どもと「つながった！」という実感が生まれ、子どもとの心のつながりが生まれてくるようになったと考えられる。

以上のように、作業療法士の視点をすることで保育者の子ども理解の深まりを感じる。保育者が子どもに寄り添い、子どもを理解するために、行動を分析したり、感覚特性を捉えたりすることによって行動の要因が解ることは大切であるとする。

〈保育者の子ども理解の過程〉

《保育者の子ども理解》

- ①子どもの行為が気になる
- ②どうしてそのようなことをしているのかと思う ⇒ どうしてなのかわからない
- ③わからないが、受け止めなければ、寄り添わなければならないと思う
- ④しかし、行為が気になり、受け止めきれない
(まず、手を洗ってきて欲しい、汚いことは止めて欲しいという思いが勝る)
- ⑤よく話しかけてくれるので、聞いているが、毎回同じ内容なので、話をもう少し膨らませようと、関連することを質問するが、質問に対する答えは返ってこない。
⇒噛み合わなさを感じ、違和感を覚える。⇒それでも受け止めようと思うが違和感が勝る。



作業療法士とのコンサルテーション

《保育者の子ども理解の変化と子どもの変化》

- ① 子どもの行為の意味が分かった ⇒ 関わり方の明確な方向性が分かった
⇒ * 手や物を口に入れるのも、同じことを繰り返し話すのも不安からくるもの。
* 子どもが自分の気持ちに抑制をかけている (我慢している)
* 自分からの発信が難しい



本来はお母さんとの安心感の形成が大切だが、そこを母親に求めることは難しいのでまずは担任との安心感の形成に努める。

本児が担任につながろうとすること (話しかけたり、遊びに誘ったりすること) そのものを受け止めることが大切だと痛感する。

- ② 本児のありのままの姿を含めて素直に受け入れることができるようになった。

今まで気になって、止めて欲しいと思っていた同じ行為が気にならなくなる。

話しかけたり、遊びに誘ってくれたりすることが快いことと受け止められる。

遠回しな表現や気持ちが言えずにいることも、受け止め、代弁できるようになる。



《子どもの変化》

- ③子どもに変化が現れる。泣いたり、怒ったり、喧嘩したりということができるようになる。



《保育者の変化》

- ④ 本児からの発信や表出の全てが「OK！」

泣くこと、怒ること、喧嘩すること、遠回しにでも気持ちを言葉にすること、噛み合わないながらも話しかけ

てくれること等、本児からの発信や表出の全てが「OK!」「いいぞ!!」という気持ちで受け止められるようになった。〈不思議な子〉と感じていたが、〈愛おしい子〉となる。

↓

《子どもの変化》

⑤本児の絵が変わる。何を描いているか分からなかったが、「人」がしっかり描けるようになる。

V. まとめと課題

本研究では、まず幼児教育・保育において求められる子ども理解とはどのようなものであるかを確認した。これまで、子ども理解の重要性やその視点について多くの研究がなされおり、子ども理解なしに保育はできないと言われるほど、子ども理解が大切であることが述べられている。幼児教育・保育において子どもを理解する時、子どもの行動の分析や行動の意味を考えることなく、また標準とされる子どもの姿（発達のめやす）と照合することでもないという考えが多くある。そして、内面の理解、内面に寄り添うことに重きが置かれ、その上で子どもとの信頼関係の形成を大切にしながら、子ども理解を深め、教育・保育の実践を行ってきた。しかし、それだけでは解決できないことや悩みがあり、保育者は子ども理解に努めながらも保育において葛藤し、悩み、困難さを抱えている。そこで、次に子ども理解における保育者の悩みや困難さの理由はなぜなのかを一考した。それは、子どもの行動の意味（行動要因）を理解できないことからきているのではないかと考える。子どもの行動の意味（行動要因）が分かることにより、なぜそのような行動をするのか、どのように関わるといいのか、どうすれば安心してその子らしく過ごせるのか、どのような遊びが楽しめるのか、などが分かるようになり、子どもとの関わりの中での葛藤や悩みに対する具体的な方向性が示される。

そこで、子どもの行動の意味（行動要因）を探る視点として作業療法士の分析の視点が子ども理解に有用ではないかと、作業療法士とのコンサルテーション事例から検証をした。

作業療法士の視点は、子どもの行動の背後にあって目には見えない、その子の感覚特性、心身の発達の姿（身体発達の発達、認知面、情緒面）から行動の特性や要因を分析する視点であった。

今回の事例の場合、保育者は、子どもの行為面から子どもを捉え、子どもに寄り添い、子どもを受け止めようと努力するが、逆に行為面が邪魔をして受け入れることを困難にさせていた。それは、「なぜそのような行為をするのか」をきちんと分析することができていなかった

からではないかと思う。同じ子どもを作業療法士が、感覚特性の面、発達面、情緒面、認知面など様々な側面から分析し、行動の要因を絞り込むことにより、「子どもがなぜそのような行為をするのか」、「何に困っていたのか」、「何が必要であったのか」などが分かるようになり、保育者はありのままの子どもの姿を受け止めることができたのである。

作業療法士とのコンサルテーションを通して、子どもの行動の理解や行動の要因を探る視点をすることで、保育者が本当の意味で子どもを受け入れ、内面に寄り添うことができるようになり、子どもとの関係も好転した。子どもの内面に寄り添うためにも、子どもが示す行動の要因、行動の意味が解ることが必要であり、そのために作業療法士の視点が有用であることが示されたのではないだろうか。

今後、子どもを理解する上で、内面理解に加え、行動に現れている背後にある行動要因や感覚特性、発達特徴を分析して子どもを理解する視点を取り入れる意義を確立できるよう、事例検討を重ね保育者と子どもの変容を丁寧に確認していきたいと思う。

文献

- 相浦雅子『子ども理解に関する一考察』別府大学短期大学部紀要第37号, 2018, pp.59-66
- 岩崎婉子・藤樫道也・関口準『保育者の悩みの実態とその分析（1）－保育者への意識調査より－』早期小児ケアと教育に関する日本研究学会, 1997, pp.800-801
- 岩崎婉子・藤樫道也・関口準『保育者の悩みの実態とその分析（2）－幼児理解と過程との連携に関する悩みを中心に』早期小児ケアと教育に関する日本研究学会, 1997, pp.801-802
- 上山瑠津子・杉村伸一郎『保育における子ども理解の研究動向－保育者の認知過程の観点から－』幼年教育研究年報第40巻, 2018, pp.61-71
- 大久保めぐみ『作業療法士との連携による保育者の子ども理解－子ども地域支援事業の調査から－』大阪総合保育大学紀要第12号, 2017, pp.165-178
- 加藤弘美『保育園・幼稚園における気になる子ども・気になるおとなの理解と支援－巡回療育相談を通して－』生涯発達研究第10号, 2017, pp.71-76
- 厚生労働省『保育所保育指針』厚生労働省告示第117号, 2017
- 権藤真織・柴ひろ・戸江茂博『保育者養成教育の視点からみた

- 「子ども理解」児童教育学研究 (37), 2017, pp.55-69
- 佐藤有香・相良順子『保育者における幼児理解の視点』こども教育宝仙大学紀要 5, 2014, pp.29-36
- 内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』内閣府／文部科学省／厚生労働省 告示第 1 号, 2017
- 中坪史典・香曾我部琢・後藤範子・上田敏文『幼児理解から出発する保育実践の意義と課題－幼児理解・保育計画（デザイン）・実践・省察の循環モデル提案－』子ども社会研究 17 号, 2011, pp.83-94
- 平松美由紀『保育者に求められる子ども理解の視点について』中国学園紀要 (16), 2017, pp.169-176
- 文部科学省『幼稚園教育要領』文部科学省告示第 62, 2017
- 文部科学省『幼児理解に基づいた評価』文部科学省, 2019
- 渡辺桜『保育者に求められる子ども理解－子ども理解の様々な視点と基本的特性－』愛知教育大学 幼児教育研究第 9 号, 2000, pp.27-32

One Consideration of the Diversified Viewpoint to Deepen Our Understanding of Children

: A Case study of Childcare Comprehension by Nursery School Teachers Through Consultation with Occupational Therapists

Megumi Okubo

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

In kindergartens and nursery schools, understanding children is defined as the starting point of childcare. Therefore, the childminder makes a strong effort to understand children. However, understanding children is actually very difficult. Therefore, many childminders find that they must deal with one difficulty after another. One of the reasons for this may be the weight given to the idea that understanding children requires “snuggling up to the inside of a child.” “Snuggling up to the inside of a child” is indeed very important, but at the same time it is difficult to put into practice. This is because we really do not understand children’s behavior. Many studies have been done investigating understanding children and their viewpoints. To deepen our understanding of children, it is said that multiple approaches are necessary.

In this study, I first reconsider what kind of understanding of children is expected in kindergartens and nursery schools. Second, I reconsider why childminders are having various kinds of inner conflicts, suffering and difficulties despite their efforts in trying to understand children. To accomplish this, I will examine an example of a consultation with an occupational therapist for the purpose of understanding what kind of perspective childminders should employ when they seek to understand children. Third, I will clarify how the viewpoint of the occupational therapist plays itself out in the process of understanding children, and how useful this viewpoint is in seeking to understand children.

Key words : understanding of children, viewpoint, occupational therapist, consultation, analysis of behavior